HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	Shinto shrines in the Japanese sphere : centre, periphery, and beyond, 1868-1945 [an abstract of dissertation and a summary of dissertation review]
Author(s)	清水, 佳理
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	甲第13976号
Issue Date	2020-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/78670
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Karli_Shimizu_abstract.pdf, 論文内容の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（教育学）　　氏名：清水佳理　（Karli Shimizu）

学位論文題名

Shinto Shrines in the Japanese Sphere: Centre, Periphery, and Beyond, 1868-1945

帝国日本における神社―領域の中心・周縁・境界を超えて　1868-1945 年

この論文は、1868 年の明治維新から 1945 年の第二次世界大戦の終わりまでの日本国家の世俗主義の発展に関して、近代神社を探っていくものである。三つの主要点を挙げている。1点目は、近代神社はどのように公的・歴史的・現代的なところ乃ち世俗的なところとして扱われていたか。2点目は、近代神社は特に「空間」「時間」「倫理」に関する新しい感覚を浸透させていくことにより、いかにして日本的な世俗性（secularity）を日本臣民に伝えたか。3点目は、近代神社は植民地化による新しい皇土や臣民をどうやってその日本的な世俗に取り入れるよう機能したか、である。

この論文では、第一章では「宗教」や「世俗」などの用語を近代の解釈で見ていく。「宗教」や「世俗」という近代用語は、「世俗主義」の政治制度から定義された概念カテゴリーである。近代概念としての「宗教」は 19 世紀の半ばに日本に取り入れられたが、欧米的な「宗教」の概念を日本の状況に適応させるために数十年かかった。1890 年の明治憲法の制定により、大日本帝国は宗教的信仰の自由を限定的に保証する無宗教国家として確立されていく。しかし、神社は信仰や教義から分離され、「国家の宗祀」の場として法的にも「無宗教圏」に置かれていた。無宗教圏に置かれたところとして、神社は臣民に新しい「日本的な世俗性」を浸透させるものとなった。世俗性、乃ち日本政府による世俗主義の政治体制の中で広められた共通理解は、「世俗」に関する欧米の近代概念に基づいたものであった。しかし、日本の「世俗」は神道や儒教の伝統を使って日本国家の状況に適応させられていた。この論文は神社と日本の「新世俗」の関係を探り、本国および海外の臣民にその新世俗を伝えることにおいて神社がどのような役割を担ったかを見ていく。

第二章では、当時の日本という枠組みの中の神社について論じる。奈良県の橿原神宮は神武天皇の即位の儀が行われたことから、地理的、時間的に近代日本の発祥地だとされていた。近代神社戦後の一般的な解説と違い、「政府の命令によって世俗的な場所を装った、本来的には宗教的な場所」ではなく、むしろ、19 世紀後半に「宗教」や「世俗」という近代概念が日本に採用され日本の状況に適応されると共に、神社は日本の「新世俗」圏にあるものの様相を呈してきた。つまり、神社は公共的で、歴史的で、現代的な場所、乃ち「世俗的」な場所としての特徴が強くなっていくのである。同時に神社は、宗教や迷信的なことから遠ざかった。特に正統派の教義や死者に関わることなど、日本の新しい宗教圏に置かれるものを神社が拒否する傾向があった。さらに橿原神宮は、世俗的な場所として扱われたことだけでなく、日本の新世俗性を促進するものでもあった。日本国家の近代化のプロジェクトは「時間」「空間」「倫理観」に関する近代日本的な新しい感覚の促進を含んでいた。

第三章では、北海道にある三つの神社について検証する。北海道は、1869 年 7 月の北海道開拓使の設立により、明治政府による最初の新領土となった。北海道総鎮守である札幌神社は、世俗主義の扶植につれて「宗教」や「世俗（無宗教）」の定義の変化と近代神社の関わりを示していた。札幌神社は、初期の段階では多種多様な習慣や組織との関係を築くが、日本的な世俗主義が発展するにつれ関係を絶った。橿原神宮と同じように、札幌神社も無宗教圏に置かれていた。札幌神社はもう一つの重要な役割を担った。新皇土北海道の唯一の官幣大社として、この新領土を皇国の豊饒な一部へと組み入れていくことを支えた。北海道護国神社も「皇国化」プロジェクトの一端を担った。官幣大社と護国神社の両方は新しい日本の皇土に可欠な要素となった。北海道護国神社の例は、これまで宗教圏に置かれていた死者が神社の領域に取り入れられていく漸進的な過程を示している。第三章の最後は、小さな村、下富良野の鎮守社である富良野神社について述べる。富良野神社は北海道の平民も世俗的な近代神社概念を受け入れ、政府の近代神社の基準を応えられるように努めたことを示している。

第四章では日本統治下の台湾の神社について探っていった。台湾は近代日本が初めて戦争で得た領土で、国際的な帝国社会に日本が正式に登場した象徴であった。ここでも神社は台湾島の開拓や文明化の政策を支えるものであった。北海道開拓の成功例に習い、台湾神宮も無宗教的な場所としての立場に立ち、日本の新世俗を新皇民に伝え、台湾を新皇土として大日本帝国に取り入れた。台湾総督府は国家の宗祀に相応しく、厳しい基準で厳粛な敬神を維持ができる神道的な場所を「神社」として認めた。神社の設立や公認は総督府によるものだったため、台湾在留内地人の意志で創立された神祠などはほとんど「神社」として認められなかった。したがって、台湾の神社は主に国家の宗祀の場所として、トップダウン方式で決められた機関であった。同時に総督府が神社の定義を拡大し、台湾の古典中国文化を利用して、台湾的要素も日本の新世俗に溶け込ませた。しかしながら、外地での内地化運動の拡大につれて、海外神社の理念も「開拓の神学」から「同化の神学」へと変化していった。

第五章では日本国家の影響圏の端にあるハワイへと目を向けた。20 世紀前半ハワイはアメリカの海外領土であった。ハワイ在留日本人は神社を設立していたが、それらは日本国の無宗教神社の概念の影響だけではなく、アメリカ合衆国の世俗概念の影響も受けていた。日本と同様にハワイ在留日本人も神社を儀式を行う世俗的な場所ととらえることが多かったが、本国にある神社と異なり、ハワイの神社は法によって教派神道の団体とのつながりを保つことが認められていた。ハワイの神社は日本語のコンテクストでは神社と宗教的な教派神道をはっきりと区別することで、英語のコンテクストでは神社と教派神道は同一つの宗教用語に翻訳することで、多様な様相を使い分けていた。つまりハワイの神社は、神社をアメリカの宗教圏へ移行する時は、教派神道との関係を利用することができたのだ。